川柳マガジンクラブ句会

平成19年12月9日(日)　駒込学園にて

［参加者］

安藤紀楽、五十嵐淳隆、石崎流子、石田きみ、井手ゆう子、伊藤三十六、小倉利江、加藤品子、北川キミ代、甲野竜雄、五味田達也、白勢朔太郎、菅井京子、関　玉枝、高田宣子、棚瀬くんじ、三浦哲夫、南野耕平、水野絵扇、村田倫也、藤井成子、横山きのこ、若山かん菜、尾藤一泉、植竹団扇、松橋帆波（26名）

宿題「今年のニュースから」尾藤一泉選

「佳作」

あっと言う間だったね二百五十年　紀楽
最近の龍は亀より大人しい　団扇
ハニカミの笑みおばさんの骨を抜く　きみ
お土産屋賞味期限に悩まされ　きみ
シャホチョーに振り向く人が日本人　品子
少子化に王子様だけよく生まれ　きのこ
行ったまま白い恋人舞い戻る　ゆう子
由緒あるペットおねだりなどしない　品子
イエスマン盾にどっぷり甘い汁　玉枝
相撲部屋なるほど撲と書いてある　淳隆
少子化へたらい回しの医者不足　成子
壊し屋の涙で地盤沈下する　かん菜
原発がもぐらの穴の上にいた　くんじ
弁当を食う暇もない辞任劇　団扇
バツ一にあんこが罪を懺悔する　淳隆
新聞が仲介をする政治劇　竜雄
一円の領収書など見たくない　倫也

「秀作」

世界一グルメな街ですする粥　耕平
最高の客をのがしたゴルフ場　淳隆
里親を探し始めたチルドレン　流子

「特選」

社保庁の庭に底無し沼がある　品子

「軸吟」

食いものが鯖をよんでた誕生日　玄武堂

没句評

時事吟の没句評は課題吟に比べて難しい。課題との響きあい、ウイットなどから比較しやすいが、時事吟の場合はニュースの大小でそれを比較する事はできないからである。選考の基準である、オリジナリティーがあること、あまり小さなテーマでない事、同想・類想作品の比較、を勘案した上で没句を評することとする。

ビンの蓋まで選別を迫られる
今年のニュースからという範囲ではインパクトが弱い。

変装を監視カメラに暴かれる
平凡。これまでにも出ている着想。

ニッポンの品格下げた辞任劇
「品格下げた」と言わないで風刺が出来ていれば。

使い捨てオレもヒールもヒーローも
「ヒール」ではなく「王子」ならもっと広がったのでは。

歳月を風化させない拉致家族
数多く詠まれているテーマだけに、違う切り口が欲しい。

民主党党首期限を張り替える
「党首期限」ではなく「賞味期限」でよかったのでは。それで党首を表せたのではないか。

百回もゴルフ汚職は仕事です
面白い作品だが、同想でより良い作品があったため採れませんでした。

東京句会袋回し

参加者を十二名ずつ二班に分け、人数分の課題を3分吟で作り、封筒に入れて回していくという形を採りました。短時間に集中して作句することを経験していただくことを目的としています。当然、推敲の時間はありませんから、抜句、没句共に、後ほど見直していただき、今後の作句の参考に役立てていただければと思います。

「顔」 若山かん菜選

「佳作」

お互いに理想と遠い顔と住み　品子
真夜中の上司の顔を見てしまう　きのこ
すぐ顔に出る嘘付きが愛される　紀楽
腹の底までは読めない顔の皺　利江

「秀作」

そのうちにプラスチックの顔になる　三十六
顔じゃない言いつつ顔を見る見合い　品子
一瞬の顔インプットする刑事　品子

「特選」

町の顔大合併で消えて行く　三十六

「顔」 関　玉枝選

「佳作」

美人よりかわいいと云う下ぶくれ　キミ代
名案は出ないが満面恵比寿顔　哲夫
ドーランを落として母の顔になり　きみ
横顔がいいと三面鏡が褒め　きみ
整形の顔をタレントは並べ　京子
名札などいらない親と同じ顔　流子
時々は照れ笑いする反抗期　ゆう子
おきれいと言われ嘘でも嬉しがり　きみ
顔色を読むのはうまい一人っ子　宣子
いざ行かん三面鏡にある笑顔　哲夫

「秀作」

眉描いて見なれた顔が出来上がる　流子
プチ整形しても誰ぁれも気付かない　ゆう子
この顔が俺かと鏡見たくない　倫也

「特選」

あの顔が見当たらなくて今日の会　くんじ

「光る」 甲野竜雄選

「佳作」

キラキラのツリーが隠す省エネを　かん菜
アルバムの中にまぶしいボクの顔　耕平
フラッシュのタレント囲む無駄遣い　淳隆
外出の嫁へ姑の目が光る　品子
新人の背広鱗を光らせる　利江
光るもの必死に探す内申書　団扇
社保庁へオンブズマンの目が光る　紀楽

「秀作」

一瞬の光世界を闇にする　淳隆
鍋光る女の自負を覗かせて　紀楽
お絵かきへママの瞳に星を描き　利江

「特選」

宝塚一年生で決まる道　品子

「光る」 高田宣子選

「佳作」

やっと得た職に出る靴光らせる　玉枝
逆光で眺めて好きになった人　ゆう子
眩しくてめまいしそうな夏の浜　京子
光り物つけていそいそ母は出る　ゆう子
チラチラとあかりを見せてイカ釣り場　京子

「秀作」

若人の貧に負けない目が光る　哲夫
頭頂の禿げてることを自慢する　哲夫
光ってる雪にとられる老いの足　哲夫

「特選」

重い口たまに一言光ってる　玉枝

「街」 五十嵐淳隆選

「佳作」

街中にたぬきもワニも住んでいる　きのこ
コンビニが目印となる街外れ　朔太郎
ホコ天の銀座がこんなにも広い　紀楽
良く見れば街道らしい古地蔵　品子
理由なき反抗街にたむろする　利江
ガス燈が似合うと思う霧の街　団扇
待ち合わせ街は幸せ色に見え　品

子

「秀作」

ケータイはオフにしておくレトロ街　紀楽

ウォーキング街の小さな歴史知る

コンビニが街をおんなじ顔にする　紀楽

「特選」

満月の夜に牙むく街に住む　耕平

「街」北川キミ代選

「佳作」

お帰りよ幼げな子等ネオン街　成子

これからの暮らしを思う街の角　京子

粉雪の舞ってる街の灯の温さ　哲夫

若者と対で話せる街づくり　流子

街角の顔へ逃れぬ募金箱　きみ

街に光を放っていますダイオード　絵扇

この角を曲ると出逢う街がある　流子

十代を深夜の街が帰さない　玉枝

街角で拾った生気欠いたノラ　京子

淋しさを溶かしてくれる街明り　宣子

「秀作」

こんな日は塞ぎ込まずに街に出る　京子

街角を曲ればオレの影が消え　哲夫

街角に躍り狂っている小雪　哲夫

「特選」

社会鍋街は聞こえぬ耳ばかり　きみ

「テレビ」加藤品子選

「佳作」

ああテレビなどと言いつつまた点ける　耕平

情報がメタボの脳にするテレビ　利江

スポンサーのご厚意という意味不明　団扇

地デジとは何の事かと妻に聞く　三十六

薄型を競うテレビは壁飾り　かん菜

朝ドラの十五分間留守電中　朔太郎

朝ドラの主役のその後気にしてる　朔太郎

四本の足で立ってたいいテレビ　きのこ

音だけを聞いて画面は斜に見る　竜雄

タレントが局のおカネで食べ歩き　淳隆

「秀作」

プロレスも夢もテレビが連れてきた　きのこ

何やかや下駄を履かせる視聴率　淳隆

戦争も飢餓もおもちゃにするテレビ　きのこ

「特選」

買い換えを恐れてテレビ壊れない　団扇

「テレビ」井出ゆう子選

「佳作」

朝っぱら殺人事件見るテレビ　倫也

一日があっと流れるおもちゃ箱　成子

テレビッ子親よりニュース知っている　キミ代

液晶の画面皺まで映し出し　キミ代

テレビ消す用事はかどるお昼時　キミ代

定年後何度も覗くテレビ欄　京子

「秀作」

でかすぎるテレビで部屋を狭くする　玉枝

テレビ見ないと無人島にいるみたい　流子

薄くなるテレビの中味なお薄い　くんじ

「特選」

介護の半分テレビに任せてる　流子

「掴む」伊藤三十六選

「佳作」

専用車知らずに掴まれたお手手　紀楽

もう一度掴んでみたら目が覚めた　きのこ

掴まえて掴まえられて親子ですね　紀楽

この次は掴んで放さないでくれ　きのこ

豊かさが掴みどこない子を育て　利江

どこの派へ行くのか掴み金次第　淳隆

胸ぐらを掴まれてから出す本気　耕平

「秀作」

青雲を掴む心はまだ死なず　品子

掴んでやるぞ雲だって虹だって　団扇

四十過ぎの恋掴んだら離さない　紀楽

「特選」

掴まれた証拠坊やの日記帳　団扇

「掴む」藤井成子選

「佳作」

働いてこの幸せの虹掴む　哲夫

混む電車夫掴んで離さない　玉枝

老夫婦初めて掴む散歩道　くんじ

温かいご飯今朝の幸せ噛みしめる　キミ

代

二十年掴み切れない人がいる　ゆう子
十円を寄附して今日は幸掴む　キミ代
ひと掴みの思い出だけで生きてます　ゆう子

「秀作」
ライバルに悪い情報掴まれる　宣子
マンネリを抜けるヒントを掴みたい　倫也
頂点で掴んだものは只空虚　きみ

「特選」
カネカネと掴んだ腕に粗朶の杖　哲夫

「古い」　南野耕平選

「佳作」
五十年添って古着の妻の味　利江
古本屋町を昔の顔にする　紀楽
古時計父の記憶と共にある　団扇
リバイバル困ったときの逃げ道に　かん菜
古い国選ばれるのも古い顔　達也

「秀作」
ナツメロを褒められているお若いの　団扇
古い人ばかり集まる村祭り　淳隆
古時計家主のような顔でいる　紀楽

「特選」
正確な古時計だな音が細い　朔太郎

「古い」　三浦哲夫選

「佳作」
古漬けが食べたくなって里帰り　流子
千年後光源氏はまだ王子　ゆう子
リメイクに母の着物が生き返る　倫也
古くまで持たない主義の店の粋　キミ代
がらくたを並べたような骨董屋　キミ代
捨てる事考えながら陶器市　玉枝
古米とて料理上手は選ばない　成子
これっきりな店でも伊万里高く見え　キミ代

「秀作」
古浴衣母の匂いの温かさ　ゆう子
ときめいて撮った写真もセピア色　流子
これ大丈夫姑は鼻の先へ持ち　きみ

「特選」
代々の箪笥家宝の艶となり　きみ

「食べる」　五味田達也選

「佳作」
バイキング昼の分まで食べておき　紀楽
半額で買う賞味は気にしない　利江
食べ過ぎに注意と寿司に書いてない　紀楽
とちおとめハウスの中で食べ頃に　三十六
食べる前生産国を吟味する　かん菜

「秀作」
通夜の席食欲はもう立ち直り　品子
ビールだけ飲んで食べてる時がない　竜雄
バイキング少しずつ取る知恵もつき　竜雄

「特選」
赤福に懲りておたべも遠慮する　団扇

「食べる」　菅井京子選

「佳作」
朝がゆが今日も元気と言っている　流子
会うたびに美味しい言葉食べている　ゆう子
やせ型は夢まで食べて太らない　宣子
グルメ旅メタボの素を美味しがり　きみ
食べることだけが楽しみやるせない　倫也
ホットドッグ美女が食べてる仁王立ち　ゆう子
バイキング取ってる時は飢餓の中　キミ代
バイキング損した気分食べ残す　倫也
美味しくて腹八分とは難しい　成子
食欲の秋も終って不貞寝する　倫也

「秀作」
孤独でも美味しい話食べません　ゆう子
冬来る猫も私も食べ盛り　哲夫
食べるだけ食べて静かになるホーム　哲夫

「特選」
外食の多い息子に盛る緑　玉枝

「空」　横山きのこ選

「佳作」
天を突く杉の梢に十三夜　朔太郎
卒業証書まるめて覗くちぎれ雲　朔太郎
三丁目の夕日が染める西の空　三十六
空泣きと見抜かれたので空笑い　団

扇

真冬でも花火が上がる首都の空　紀楽
夜空にも言いたいことはあるだろう　耕平

「秀作」

あの星は娘の涙かも知れぬ　淳隆

十二月八日ハワイの空に飛ぶトンボ　三十六
空港へ空弁だけを食べに行く　団扇

「特選」

入れてくれ猫がいつまで空仰ぐ　達也

「空」　石田きみ選

「佳作」

悲しみを映した空の鉛色　京子
雨の空眺める猫の背なが好き　ゆう子
空っぽの頭で何も出てこない　倫也
鈍感に生まれ空気は読めません　倫也
大樹から仰いだ空は広かった　哲夫
朝の空仰いで今日を確かめる　玉枝
見上げれは苦労も消える青い空　京子
早朝の空は水色引き込まれ　玉枝

「秀作」

上の空まさか私を好きなんて　倫也
青空に大筆で書く丸一つ　流子
辞職きく有終の美か茜空　成子

「特選」

曇天も晴らすニュースに空が晴れ　キミ代

「熱い」　白勢朔太郎選

「佳作」

熱いうち打てと言われて火傷する　団扇
国民の視線が熱い永田町　淳隆
ワンカップひとりで熱くなってくれ　きのこ
老いの恋熱さはミルクティー程に　紀楽
熱いうち叩け日本が広くなる　三十六

「秀作」

恋ならば37度じゃすまんやろ　耕平
教官の熱反抗も牙を折り　利江
温暖化地球そのうち火傷する　紀楽

「特選」

一葉と英世が熱い皮財布　きのこ

「熱い」　水野絵扇選

「佳作」

熱くなる刺激が欲しいなんて嘘　団扇
やな奴に熱い視線を送られる　宣子
終い風呂私の為に熱くする　玉枝
あの人の姿へ胸を熱くさせ　きみ
柳論を語るあなたの目が熱い　流子
アツアツと云われた仲で冷やっこ　くんじ
熱いもの熱く頂くエチケット　きみ
いい首尾へ熱燗うまく喉へ落ち　きみ
奥底へまだくすぶったマグマ持つ　ゆう子

「秀作」

胸割って見せたい熱いこの思い　流子
熱い手が私の心掴んでる　哲夫
熱くなる若者がいる町に住む　流子

「特選」

熱いキスすることもなくまだ夫婦　京子

「着る」　植竹団扇選

「佳作」

ファッションの森が熟女を蝶にする　利江
もういいよそろそろパンツはいてくれ　耕平
パソコンで試着ができる洋服屋　かん菜
形見分けちょっと着てみてすぐ返し　淳隆
三代が着飾り笑う宮参り　三十六
兄ちゃんの上着ばかりでよく育ち　淳隆
留袖をミニスカにしてはくセレブ　淳隆
トラバーユ今日から青い背広着る　紀楽
晴れ着着た妻にやっぱり惚れ直す　竜雄
スーツ着て犬も公園デビューの日　紀楽

「秀作」

罪を着る積りで背なに子を隠す　三十六
勝負服騎手の背筋をピンとさせ　紀楽
思い切り息吸い込めば着れるはず　耕平

「特選」

ユニクロが最後の砦老いのシャレ　竜雄

「着る」　棚瀬くんじ選

「佳作」

ライバルに一つくらいは恩着せる　宣

子　ゆう子
別れてから背中のボタン止められぬ　ゆう子
ゆったりと母の紬を着る時間　きみ
編み終えて母に着せたい初春を待ち　きみ
背見上げ父の形見を着せてみる　ゆう子
ジッパーは息を吸い込み持ち上げる

「秀作」
無理やりに詰めて出られぬ試着室　哲夫
妹と貸し借りをして着るドレス　玉枝
鑑識が着衣の乱れ気にかける　京子

「特選」
三男坊古着ばかりが回される　哲夫

「酔う」　安藤紀楽選

「佳作」
白魚の指が熱燗お酌する　朔太郎
酔うほどに壊れてくのよこの世界　耕平
二日酔い昨日のことはみな忘れ　朔太郎
本人が言ってるんだぞ酔ってない　団扇
コーヒーで酔う真似をする辛い役　品子
酔い覚まし酒にしているろくでなし　団扇
酒よりも人に酔ったか二日酔い　耕平
酔えないわそんなアナタのウソなんか　きのこ
好きな人いるから酔いがすぐ回る　きのこ
酔った振りして言う言葉すでにある

「秀作」
酔った振りで社内情報メモに取り　三十六
三杯でもつれる足を叱りつけ　竜雄
今夜だけ酔って甘えてみたい人　きのこ

「特選」
酔い痴れてまた酔い痴れてはや傘寿　団扇

「酔う」　石崎流子選

「佳作」
ゆうべまで正常でした二日酔い　哲夫
しらふでは言えないのです酔わせてね　ゆう子
出不精は商店街で人に酔い　宣子
酔顔に女房の目だけよく見える　くんじ
台所はじめる前に先ずビール　玉枝
酔ったって釣りはしっかり貰ってる　倫也
お花見は酒より好きな花いかだ　キミ代
好きだから君を酔わせてみたい夜　京子
じいちゃんが酔うといつもの一ツとや　きみ
雪月花酒は酔わなきゃつまらない　京子

「秀作」
祝われる母も一節いい機嫌　きみ
酔うことを知らぬ背中を見つめてる　くんじ
女ある夜不覚に酔ってみたいもの　きみ

「特選」
酔うほどに可愛い顔になる親父　哲夫

「川」　小倉利江選

「佳作」
川底で春を待ってる魚達　品子
アザラシが去って静寂取り戻す　かん菜
川下の村から苦情くる団地　竜雄
川沿いに住んで予報を欠かさない　品子
木を切って川に栄養なくなった　竜雄
川の字に寝た子に命狙われる　品子
こんなにも細かったかな里の川　淳隆
傷口を洗いに里の川に来る　紀楽
鮭の住む川になったと墓に告げ　三十六
逆流に棹さしている頑固ですよ　団扇

「秀作」
青空をごくごく飲んで川育つ　きのこ
川一つその先にある深い闇　三十六
川下に住み清濁を合わせ呑む　紀楽

「特選」
蛇行する術を知らない若い川　淳隆

「川」　村田倫也選

「佳作」
悠久の大地の川も滴から　ゆう子
草書体川が流れる如く書く　京子
大井川力士は背負えたのかしら　京子
悠々と大河の流れ迷わない　哲夫
川幾つ越えただろうか夫婦道　京子
人生の川の流れで浮き沈み　玉枝

「秀作」
夢の中小川の鮒を追いかける　哲夫
叱られて川を見つめていた少女　流子
夫との間に深い川の姑　京子

「特選」

川の字はいつしか猫を中にして　ゆう子

呈賞

合点1位　三浦哲夫　36点

抜句数1位　安藤紀楽　22句